





白陀羅尼序

東華坊

是源生身の他信よるまゝの變化あるもの信の
 毒麻よまゝよりして法華よるまゝの信よるまゝ
 なりて涅槃の一字不從よるまゝにして五千餘巻の法華を
 てあつてしむるもの變化はさる事なるべし
 先師の死後十餘年變化はさる事なりしもの時の理を
 多く辨經より論者ありしもの人の信信も變化
 せしむるものありて牧の馬のやりのまゝありしもの

ゆきつゆのふゆをきくは変化も百足の羊のさゆ
あまふくききらぬ乃自在さうんをさうそ自在を
人さうふくききらぬ乃馬鹿馬角のあさう
あまふくききらぬ乃山樵小童のあさう
さうふくききらぬ乃さうふくききらぬ乃
さうふくききらぬ乃さうふくききらぬ乃
さうふくききらぬ乃さうふくききらぬ乃
さうふくききらぬ乃さうふくききらぬ乃

元禄甲申二月日

徒書

梅のむ
庭に掃くも喜はるさみ 北枝
雲を霞の定ぬりぬさうふくききらぬ 支考
二果ももあうしに余はぬお子を 台
あまふくききらぬ乃あまふくききらぬ 枝
思ひハ中てあうしに秋の野 若

ワ
清みよと管絃一うとまゝに如
吾

孫ハおしやぬ後の用心
枝

松陰よまはしりいおやち
考

いりぬ所置もたし掃除か
吾

そしりぬ所置もせりおり
枝

聲一見もちし是くぬといふ
考

三チウキ川で白鼻をちかんとして
吾

撮二戸板のころふ夕月
枝

是ハさう係きしり乃私の
考

水の森すれ中りて
吾

吾去りて水の流す
枝

心とよりよふあの
考

二
回越すけくまよあつと
吾

杜折すぬて欠アケヒはよ
枝

歌くくぬ命もさるい
考

曉のぬ脈ハさる
吾

榎かゝ十のふてし庭の馬 枝

何れかしのふかいてや志くし 考

石灯籠電の月影のふかきよ月よ星 吾

後まよとほく歌の思とくし 枝

あゝかゝいぬ相と人かいしをく 考

貧乏神のむとひきそるん 吾

確のぬめいかくくを産所 枝

やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝの袖 考

立かゝるぬらな燈よ其る如月 吾

多分下を声く伏めく解 枝

茶湯さゝりふの御も若の陰 考

榎木めむ乃二候よ 咳 吾

翁の油と引え盤中を平て 枝

隣の亭さきも余やけり 考

さきよりなること母の氷の如

まの如きよ モミ 人のまをり 考

あやふくしうの如くへ雛の伝をて 従者

阿まのまをねハ今よまのね 枝

夜のまの伝授ハ松月の新 考

福ハちのほる 園のまを共 吾

小枝

ウ
張捨て年南まゝりし小糸細枝

いこねを柳のうきくし考

雪屋ははあおしうう百の孫 吾

師老の果よらんか後命 枝

葉録のやうな蒲園とをち考

印ひくおとのうきい屋腐を 吾

月あう移取の市乃物有 枝

草造人の命か 考

田の中思まも水分よあゝ 吾

等と花のち場か素湯よ香考 枝

お母話にむり有馬子考 考

川影借るよみか考 吾

茶屋意も及おさくさ考 枝

年うきうへぐいんか考 考

はふり火とわい考 吾

百戸おめた考 枝

水々々ふやや 淡雪 朧月

ふやふや 柳 ちろくく川 舟 従 昔

ひく 燕 矢 扱 弓 ぞ ぬ け ぬ 枝 小 枝

椽 上 出 へ 居 け ば 後 っ き こ ち 考

ね じ ゑ さ 次 々 々 々 地 子 不 空 音

逆 じ ち ち ち ち 下 さ 枝 枝

支考

子に於ぬ人の表を去りしを
 考
 也日神の日の如くやく
 吾
 け節をえゆる後乃青嵐
 枝
 きてこそれと母もいりけり
 考
 今朝のやまにさくら柳園
 吾
 一度はるる年こそなもあはれ
 枝
 まはるる秋も本は秋とかりれた
 考
 飽ぬ申のよはたさふりり
 吾

我親のやする瓢と好し
 板
 竹の尺より秋太奈のおく
 考
 七月も十日あかりの月の親
 吾
 扇の影をのぞきよあはれ
 枝
 雲のぬくや垣の蒲萄もちかき
 考
 けし阿ふふと尺の中矢肩
 吾
 雇人の本は割て居る道の
 枝
 伏箱のさしきさしり也
 考

川越をハチイ又橋ハ弓と送
音
山おこせれ山ハかかれと
枝
山向流よ流よおふ之日の月
音
松よそく透草橋のおまら
音
おろくくそ橋中橋の風音
枝
余所よりそく一流のわたりハ
音
と月火れ流よすよふと新
音
それハ流よと音よそく
枝

五反目れ流よととと
音
びと流よととと流音
音
吸おのそいやとと
枝
不れもちととと
音
流よととととと
音
かかみの下ハ流よとと
枝

七十二候

万子

鼻^{ナシ}喜^シし^シも^モ新^ニも^モあ^アり^リふ^フや^ヤ表^ヒの^ノい^い

あ^アく^クさ^サの^ノふ^フ日^ニは^ハ日^ニも^モあ^アる^ルお^オや^ヤ牧^キ草^コ

紫^{ムラサキ}の^ノ火^ヒ也^ヤや^ヤん^ンよ^ヨは^ハま^マま^マり^リま^マ考^{コウ}

く^クや^ヤふ^フと^トつ^ツハ^ハさ^サも^モも^モ味^ミ線^{セン}長^{チヤウ}緒^コ

あ^アの^ノ信^シも^モ月^{ツキ}も^モあ^アる^ルと^トか^カあ^アる^ル人^{ヒト}毎^マ日^ニ北^{キタ}枝^エ

市^{イチ}の^ノか^カろ^ロり^リ北^{キタ}も^モあ^アる^ル新^ニも^モあ^アる^ル八^{ハチ}紫^シ

茶子よりとぬき、葉の汁の琥珀也 童

一筆せしむるをやとぬハ松人 子

袴足し何よあつたの元氣と 松

山木の鈴より屏風掛り 考

琴のまゝ池よ本此葉をちしし 紫

帰る日傭は明日の約束 枝

古松よあつた顔よいふをさ 子

日影よりわらふよ織一端 童

板橋よ夕尸泊てあそび 考

写て来さうか六月の雲 緒

磯よりよこ玄園のお松松み風 枝

古史かめて美乳纏る 紫

有限よハ肩成あつた人 童

島一所松年房大根 子

かゝるはしつと月又の松便 松

蜂のくさき紙信とこさう 枝

穴鑿もかて淋しき物なり坊
手桶をさけて川の洗濯兮
市へ行く人越さるる我らも
云よそさくくそ人ぬ風も
掃除もく序は筆首取也一
たさきもぬ虫胡口く一
穢うれは江に流さるる物なり
目茶さくく茶たなま坊

干物と油煎のきぬ法なり考
石垣仕おれ身のあがり場
酒のよみ取ハ嬉し月と玉
不勤るるも中一はさく
去人ハ去人なり一啼一を在
をい世帯の先茶碗ても雨青
筆ハあちくは畑へちいり枝
ちいさく筆をさるる如く雨
山隣

あゝさゝしと醫者江夢ひて換えり 素花
辭屋てもち花走らるゆふ 牧童
らんぐり丹け清仙神の尸あけ 青
しははあき 却てハあき 考
花よぬりよあるとも親のを伝て 隙
あゝし後ふ髪もいつまき 赤
昔の美乃きよきておる志の月 幸
降ら照るハ新のくらせ也 金

後橋の儀よかふ小窓守 考
濱乃きりし娘御くらとを 青
はえよんは娘の家ハけあきり 赤
懺はてしと多肌き華礼 隣
まかちよ夕日もくらふとの空 花
ゆふとすれハぬ織とくし 連
その中のおぼえんやてむの奥 青
猿ておらんハゆふもさかり 考

あまのりのはるの寝とくはあは
雲のけりけり白隠居るも 蝶

和右

新茶古茶字法ハソク一節云 御丹
父を此道といふ事さても世をわが 正秀
廻板なる枕し柳ふりかき次 万子
確味あはるい事の世をさるは先 体古
因やいといふ癒くも話の足 雲門
梅の香や垣をさるつ 茶の徳取 小枝

あゝ暖よらんぬ物あり一谷は梅一乃
梅もや余その星はるくこゝれ也
柳もや割本の棚の山崎はる
その名も草子もはる 梅はも 玄味
畑けては和州のともや川辺に
つゆあふのそはるをさるは 佐昔
かけ路も世のさる色 多松 正勤
ゆりの 御るゆれ柳 一乃 五香

月むの月待柳もこゝへんれもや 草
藤もこゝみ新と年そゝる草本に 彦後
山吹の清より 註かより 出 彦花
啼すふいそいあはるはぬすたれト 枝赤

大物の
あかこゝる

さし水のふかきさふ 藤 一乃 味風
さし水のふかきさふ 藤 一乃 味風
さし水のふかきさふ 藤 一乃 味風
さし水のふかきさふ 藤 一乃 味風

多しりふ字々冠しし和名は柳士
 かぢりうをを同をぬとハ帳抽子十丈
 一畝の柳も敷田名のお城ハ厚お
 馬寄使は多純ハおちふ無しの長水
 本曾名もつやあそ純ハ田かふる香川
 竹はけし馬とかつこよ電ハ昨兼
 兵法ハ勝り頃まきあ純ハ益十
 多法乃之庵のふりしハ榎ハ巴静

あり人ハあそくまらうや鶴つし^日 建明
 藤のむを解なそそまき水原^美 美
 一油ハハ襦をあげしあそくハ^る 音
 ふうりとの名ハあついと^二 柳吹
 あけ鶴を^三 知く啼や表の録^在 在
 古月の蓋をとりまき^ハ 八景

有縁の浦了はし

海の名を後まき山^ハ 秋^ハ 秋

郭二庭二のまゝ 馬の上 文砌
 夫日秋をとりぬもあつね 園と雲 疎菴
 之日月や 網と遊いぬ 船の影 徒昔
 穂葉の 宿紙川さくつて 帆 里揚
 冬月や ともも 雨と雪とを 掃き 八葉
 初るや あつて 氷の月 文砌
 形もや 文の 伊勢を 見るまゝ 文砌

まゝ 荷やん あてまハ 伊勢の 内作 多花

多花の 文
 万の 山と ころと

志を ぬをとも 念の 化 秋の 文 句 本 因
 池の 星又 とも しくと 伊勢の 内 小 枝
 月おとも 園もも ことめ 雲の 文 秋 菴
 味つ 帯ハ 味付 たりつ 雲の 文 全
 何と とも とも とも 雲の 文 八 葉
 味 仏の とも とも けつ とも 秋の 文 厚 葉

こつとさしふや雪の 片折戸 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹
雪の如の月也 雪もよこし 柳吹

乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹
乃のこよと 雪もよこし 柳吹

白

急ぐ人ハこそとて急ぎふても杜の花日 指柳
雪隠ハこそよとまほく居る日 露
初日の如く、嬉しきも也其れ後 意
福日の如く居るハやい 秋日の如く 後
厚日の如く我も居る如く 根日の如く 古
啼日の如くやい 也居るの如く 意
晴日の如くやい 案日の如く 意
初日の如く 秋日の如く 意
初日の如く 秋日の如く 意

村雨也居る 秋日の如く 意
喜日の如く 秋日の如く 意
聖日の如く 秋日の如く 意

各月ハ例の降意を以て
各月ハ例の降意を以て

傘日の如く 秋日の如く 意
初日の如く 秋日の如く 意
初日の如く 秋日の如く 意
初日の如く 秋日の如く 意

何ゆふとまねとあも雲は切澄吹
雲の月とそさか枝の常 飛雲
膝もとよ月とそさか枝の常 牧童
まをねよあもくもさか枝の常 素花
まをねよあもくもさか枝の常 支考
比命と海の珠およまもくもさか枝の常 木導
かゝ獅子の顔と師のこゝれと 李由
ね月のまゝとまもくもさか枝の常 長

琵琶色くく松花や枇杷のむし
秋空のや一打雲のまもくもさか枝の常
おまの袋破くし 樽のまもくもさか枝の常
まをねよあもくもさか枝の常 角品
せりの鞠乃よあもくもさか枝の常

系へ行人のおよ
まもくもさか枝の常

政をねよあもくもさか枝の常 装枝

夜の明ぬ月夜也ゆふぬあまの枝車
ふよ入しおのはややめあまの後昔
首尾よふらぬらむきのおれぬゆり山藤

ふきより

朝りち表前もふり神送音伴
夕顔のむいあれこのや妻女三房を
美作や細川ゆり糸貫梳藁阿

新とくやえきく道子屋平一甚時
ふのひつてふのむ後や松のきり藤字
ふゆり池あふまふじり子ゆり子道

悼良代君

五来

ふのゆや空まむゆりあまへの雪

けぬいハ群よけつ夫のふよおろちふ
人のささふゆりてふの集よむれ
ふゆり此を念ふふらけきさうの
ふ向まゆきふら

我こと我然然然... 変化ありや変化とこれもおどろか
人もおどろく変化ハ生れと眼...
れはるの变化ハ生れと眼...
きのも他も変化ハ生れと眼...
いさや論... 眼の別れ

同別

五七坊

其覺しそむよあそと 孤う那

送別

七枝

お年の初をきりてきりるハ

京寺町三条上町
井筒屋庄兵衛坂

